

万葉歌に詠まれた山—その景観認識をめぐる覚書—

出田 和久

1 はじめに

景観という語は、明治後期にドイツ語のLandschaftに対する訳語として与えられた比較的新しいことばである⁽¹⁾。それゆえに古代の人々には景観という概念がなかったといっても誤りではないであろう。しかし、だからといって古代の人々の景観に対する認識がどのようなものであったかを問うことができないわけではない。なぜならこの景観という語は、基本的には眼に映ずる景色の特性と捉えられ⁽²⁾るから、古代の人々がその眼に映じた景色の特性をどのように認識していたかを問題とすることは十分に可能である。景観は、人々が自らの存在している空間を単なる物理的空間ではなく、それを生きられる空間⁽³⁾とするには必須であるといっても過言ではないだろう。したがって、むしろ景観に対する古代の人々の認識のありようを明らかにすることなくしては、古代の人々が詠んだ景観や風景の本当の意味やその背景にある心情、メタファを理解できないのではないだろうか。古代の人々の景観に対する認識のありようを明らかにすることができれば、景観の拠って立つ空間である地域に対する認識のありようについても明らかにすることにつながる。そしてまた、彼らが日本列島という生活の舞台をどのように認識していたのか、さらには国土観へも接近することが期待できるであろう。

その際、いかなる史・資料を対象とするかが問題となるが、史書の類では景観描写が比較的少なく、編纂者の主観が強く投影されすぎているであろう。これに対して万葉集には何らかの景観や風景に関して詠んだものが実に多く収載されており、古代人の景観に対する認識に接近する資料として絶好の資料といえよう。いまは古代の史・資料を網羅的に取り上げて検討する余裕はないので、ひとつのまとまった資料として万葉集を素材としたい。歌の選定には編纂に関与した大伴家持などの個人的な嗜好が反映されているかも知れないが、収載歌数が多いので極端な偏向はないものと考え、万葉集に詠まれた景観を素材として、古代人の景観・風景さらには空間・地域に対する認識のありようの解明にもつながる、ひとつの試論として検討を進めることにしたい。

2 万葉集に詠まれた山々とその分布傾向

万葉集を紐解くと、景観を主題として詠んだり、景観にことよせて作者の思いを詠み込んだり、景観に関連して詠まれた歌は枚挙に暇がない。そして、万葉集に詠まれている主要な景観要素のなかでは山がもっとも多いといえそうである。山は日本の自然景観を代表するだけではなく、地域のメルクマールとしても有用であり、人が移動する際にも目標として注目を集めやすいことも一因であろう。したがって、古代における人々の景観認識のありようを探るに際して、まず山に対する認識がどのようなものであったのかという点を中心にして見ていこうと思う。

かつて明治期の後半に日本の風景の洵美なることを説いた志賀重昂は、その著『日本風景論』の冒頭で「江山洵美是吾郷」と唱え、「日本人が日本江山の洵美を謂ふは、何ぞ畜に其の吾郷に在るを以てならんや、實に絶対上、日本江山の洵美なるもの⁽⁴⁾在るを以てのみ」として、日本の風景における江山の美を強調している。志賀の『日本風景論』には当時の欧化政策への反発という側面があったとしても、日本列島は山地面積が4分の3を超⁽⁵⁾えるので、この志賀の言を俟つまでもなく、代表的な景観・

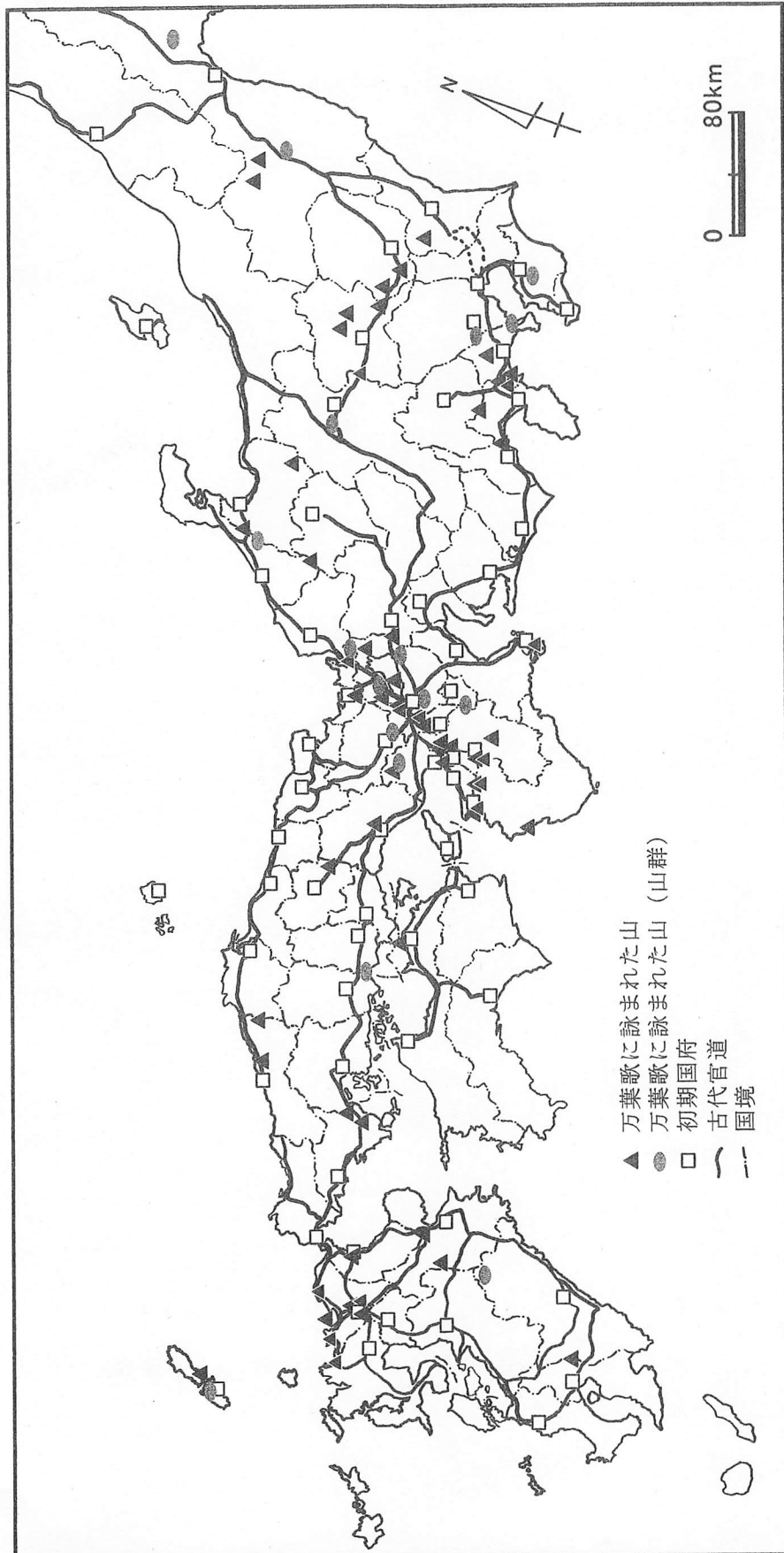


図1 万葉歌に詠まれた山

風景として山を挙げることは至極当然ともいえよう。

もちろん万葉歌に詠まれた自然景観は山に限らない。たとえば、柿本朝臣人麻呂羈旅の歌

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近付きぬ (巻三・250)

のように旅の途次において、山以外にも多くの景観や風景が詠まれていることはよく知られているところであろう。しかし、川や野などの他の景観は線状あるいは面的に広がりを持つものに対して、山は山名が示されていると比較的に点的な景観として捉えることもでき、さらにその名称が現代にも伝わるものが多く、現地比定が比較的容易であると考えられる。

具体的にどのような山が万葉集では詠まれているのかについて、固有の山の名を冠した歌(固有地名か「高山」=高い山などの普通名詞的呼称か判断し難いものもあるので正確を期し難いが)に限って数えてみると400余首あり、万葉集に収められた歌の1割弱を占める。

これら万葉集に詠まれた山のうち、4首以上に詠まれた山は23を数える。16山は大和国か大和国との国境にあり、そのうち春日山、三笠山、竜田山、奈良山、香具山、泊瀬の山、二上山が10首以上に詠まれている。それ以外では筑波山22首、妹背山⁽⁷⁾14首、富士山⁽⁸⁾11首、逢坂山(相坂山)⁽⁹⁾7首、立山5首、鹿背山4首、大野山⁽¹⁰⁾4首の7山である(表1)。

それらのうち位置比定が可能な山の分布図(図1・図2)を作成した。固有の山名を冠していても、具体的に現在のどの山に比定するかとなると難しく、ひとつの山群のうちのある峰とといった程度までしか明らかにし得なかったり、異説がある山もあったりするため不十分な点はあるが、それでもおよその傾向は把握できよう。奈良盆地や大和国とその周辺に多いのは当然としても、それ以外の地域においても分布にはかなりの偏りがあるこ

とが分かる。それらの山の位置を注意深く見ると、ある程度交通路に沿ったものが多く、交通路との関連がうかがえる。つまり、旅などの途次に眼に入った山を詠むことも多かったことがわかる。また、地方においては国府などの官衙から望むことが可能な山が多いこともうかがえる。つまり、大伴家持などのように国司等として地方に赴任した編者や作者と、具体的なかわりが見出せる地域に所在する山が多く、また同時にそれらの山は比較的人々に知られた山であったことを示唆しているようである。

図1では大和国主要部の山については一部省略しているの、図2によりこれら山の一応の分布を見ると、万葉歌に詠まれた山が、大和と

表1 万葉集に多く詠まれた山

山名	歌数	所在国
筑波山	22	常陸国
春日山	18	大和国
三笠山	16	大和国
奈良山	14	大和国
妹背山	14	紀伊国
竜田山	13	大和・河内国境
香具山	11	大和国
富士山	11	駿河・甲斐国境
泊瀬の山	10	大和国
二上山	10	大和・河内国境
神奈備山	9	大和国
真土山	7	大和・紀伊国境
逢坂山	7	山城・近江国境
佐保の山	6	大和国
高円山	5	大和国
三輪山	5	大和国
吉野山	6	大和国
三船の山	6	大和国
生駒山	5	大和・河内国境
立山	5	越中国
布留山	4	大和国
鹿背山	4	山城国
大野山	4	筑前国

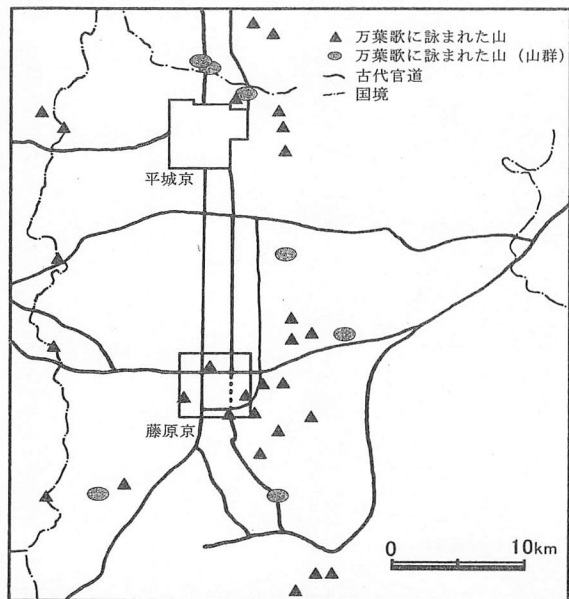


図2 万葉歌に詠まれた山(大和国主要部とその周辺)

その周辺にいか

表2 富士山を詠んだ歌

に多いかよく分	巻	歌番号	部	立	表記(万葉)	表記(現代)	作者
かる。歌の作者	三	317	雑歌		布士能高嶺	富士の高嶺	山部宿禰赤人
に大和盆地の居	三	318	雑歌		不尽能高嶺	富士の高嶺	山部宿禰赤人
住者が多いこと	三	319	雑歌		不尽能高嶺	富士の高嶺	笠朝臣金村
から当然として	三	320	雑歌		不尽嶺	富士の嶺	笠朝臣金村
も、彼らが身近	三	321	雑歌		布士能嶺	富士の嶺	高橋連蟲麻呂
な山々をいかに	十一	2695	相聞往来・寄物陳思		不尽乃高嶺	富士の高嶺	
多く歌に詠んだ	十一	2697	相聞往来・寄物陳思		布仕能高嶺	富士の高嶺	
かが伝わって	十四	3355	東歌・駿河国相聞往来		不自能之婆夜麻	富士の柴山	
る。また、逢坂	十四	3356	東歌・駿河国相聞往来		不尽能祢	富士の嶺	
山や鹿背山を詠	十四	3357	東歌・駿河国相聞往来		布時能夜麻	富士の山	
んだ歌が多いの	十四	3358	東歌・駿河国相聞往来		布自能多可祢	富士の高嶺	
	二十	4345	—		々々(須流)河乃祢	駿河の嶺	春日部麻呂

は、畿内やそれに近接した交通の要衝であるからであろう。

筑波山、富士山が大和から遠く離れているにも拘らず10首以上に登場する。そのうち筑波山は9首、富士山は4首が東歌に登場している。ほかに大和の地から遠く離れたところでは立山と大野山がある。前者は大伴家持が3首、家持の歌に和した大伴池主が2首詠んでおり、越中国守となった家持に関わりがある。後者は大宰府のすぐ背後の山で朝鮮式山城が残っており、大宰府の官人であればまず脳裏に浮かぶ山であろう。これが詠まれたのは、大伴坂上郎女が兄旅人のいた筑紫を偲んで詠んだ歌⁽¹⁾、筑前守山上憶良の挽歌、大宰帥大伴旅人宅での梅花の宴における歌会で官人の大監大伴百代が詠んだ歌などである。万葉集の編集に関わった家持に関係していたり、官人が居住していたり、縁があったりしたことなどから万葉集に収められたことが理解できる。万葉集の編集・成立や構成に関わる偏倚であることが分かる。

つぎにこれらの山を数多く詠まれたものについて、都から遠く離れた東国の山として筑波山、富士山、立山を、畿内・畿外の境界付近の山として妹背山、逢坂山を、奈良盆地の中と周囲の山として春日山、三笠山、竜田山を取り上げてみていきたい。その際特に、東国の山については東歌と中央出身の官人らとの詠み手に違いによる認識の差異に、畿内の境界付近の山については境界に対する認識の表われ方に注目しつつ、それぞれどのように詠まれているか、当時の景観認識を探りながらみることにしたい。

3 都から遠い山

3.1 富士山

富士山について詠んだ歌をみると(表2)、東歌4首はいずれも相聞歌であり、寄物陳思の2首も相聞歌に含めることができる。つまり、富士山の名が直接歌われているうちの過半数が相聞歌である。以下、寄物陳思の2首から具体的に見ていくことにする。

我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ (巻十一・2695)

は、「愛する人に会う手立てがないので、駿河の国のあの富士の高嶺のように、私の心はずっと燃え続けていることだろうか」というような思いを詠んだもので、活火山であり高峰である富士山の景観にことよせて作者の思いを詠んだ好例といえよう。

この歌では富士山が燃えている、つまり火山活動が活発であることを示しており、富士山の火山活

動史の上からも興味深いが、自らの思いを火山活動に準えて燃えるようだと表現している。作者は相手への思いを富士山の景観描写を通じて詠んでおり、直接的な恋情表現を避けている。作者の居住地は不明であるが、わざわざ「駿河なる」と詠んでいるところからすると、日常的に富士山を眼前にしているというよりは、多少距離があるところに居住し、移動時などに富士山の火山活動を実際に見たことがあるのであろう。もう1首、

妹が名もわが名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつ渡れ (巻十一・2697)

もやはり恋心を表現したものであり、ともに思慕の念を噴火にたとえている。このようにみると、当時は富士山は火山の「火」を介して「燃えるような思い」と容易に結びついたものなのであろう。

このほか東歌4首には次のような歌がある。

天の原富士の柴山木の暗の時ゆつりなば逢はずかもあらむ
富士の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとなば気によはず来ぬ
覆る富士の山びに我が来なばいづち向きてか妹が嘆かむ
さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと

(巻十四・3355～3358)

これらは富士山麓辺りを舞台として恋心を詠んだもので、東歌では「駿河国の相聞往来の歌五首」のうち四首が富士山を詠んでいる。⁽¹²⁾これらの歌の多くは、作者は明らかではないが、駿河国の住人で、富士山を間近に見て暮らす人々かと憶測される。これらの例からは富士山が恋愛と密接な関わりを持っていることがわかり、そのような心理的連想が当時の駿河国の人々に共通した意識として存在していたことを示唆するものであろう。⁽¹³⁾

また、これらとは別の1首、

我妹子と二人我見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめあるか (巻二十・4345)

は防人の歌で、作者は駿河に居住していたと考えられる。「駿河の嶺は恋しいな」と詠んでいて、直接的には富士山を恋しいと言っているが、やはり相手への愛情を表現している。寄物陳思の2首もあわせて考えると、当時東国方面とりわけ駿河国あたりでは、富士山には愛情と容易に結びつくイメージが一般に存在していたと考えられる。その背景には、後述する筑波山と同様に、富士山麓がいわゆる「山遊び」、「野遊び」の場であったことがあるのであろう。したがって、富士山という山の名を歌に詠むだけで、そのようなイメージが浮かび上がり、妹への思いは半ば通じるという共通した認識があったのであろう。

富士山というと、現在では日本最高峰であることは周知であり、山群中の一山ではなく、独立峰といってもよいであろうから、一般に秀麗なその山容が賛美されている。しかし、これらの歌ではそのような点は強調されていないことが印象的ださえる。高嶺と詠じられていてもその高さが強調されているわけではなく、⁽¹⁴⁾前述のように身近にある山として捉えられている様子が伺え、高いことはあえて言うまでもなかったのであろう。

これに対して官人たちが詠んだ歌が巻三の「雑歌」にある。

天地の 別れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば
渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり
時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける

(巻三・317～318)

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 富士
 の高嶺は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を
 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつつ 言ひも得ず 名付けも知らず くすしくも います
 神かも 石花の海と 名付けてあるも その山の 堤める海そ 富士川と 人の渡るも その山
 の 水のたぎちそ 日の本の 大和の国の 鎮めとも います神かも 宝とも なれる山かも
 駿河なる 富士の高嶺は 見れど飽かぬかも

反歌

富士の嶺に降り置きし雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

富士の嶺を高め恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを (巻三・319~321)

これらの歌の作者は、山部宿祢赤人 (317・318)、笠金村 (319・320)、および高橋虫麻呂 (321) である。前2者はいわば中央歌壇の歌人であり、後者も東国の官人となったとはいえ、大和の出身であったと考えられる。

これらの5首の歌では、富士山が高峰であり、雪を頂き、神々しいことが高らかに詠まれている。このような巻三に詠まれる富士山は、巻十一と巻十四で詠まれた富士山とは大きく性格を異にし、およそ恋心を連想させる身近さとはかけ離れた、荘厳な山の姿であると言することができる。

つまり、このような富士山の詠まれ方の差は、当時の中央であった大和国の住民であった山部赤人や笠金村、高橋虫麻呂らの持っていた、遠く離れた地であってはるかに仰ぎ見る富士山のイメージと、いつも比較的近い距離で身近に富士山を感じることでできる東国 (駿河国周辺)の人々のもつ、富士山のイメージとの相違を示している。同一の山であっても、それを歌に詠む人の居住地や階層などによって山のとらえ方、すなわちイメージに差があり、それが歌に投影されているのであろう。

このように同一の景観

表3 筑波山を詠んだ歌

	巻	歌番号	部	立	表記 (万葉)	表記 (現代)	作者
を眼にしても、そこに何	三	382	雑歌		築羽乃山	筑波の山	丹比真人国人
をイメージするかは、景	三	383	雑歌		築羽根	筑波嶺	丹比真人国人
観を見ている人の文化的	八	1497	夏の雑歌		筑波根	筑波嶺	高橋連蟲麻呂
なコンテキストと密接に	九	1753	雑歌		筑波乃山	筑波の山	検税使大伴卿
関わるから、厳密に言え	九	1754	雑歌		筑波嶺	筑波嶺	検税使大伴卿
ば作者により異なるとさ	九	1757	雑歌		筑波嶺	筑波嶺	
え言える。また、その歌	九	1758	雑歌		筑波嶺	筑波嶺	
をどのように解釈するか	九	1759	雑歌		筑波乃山	筑波の山	
は、受け手の文化的コン	十四	3350	東歌・常陸国の雑歌		筑波祢	筑波嶺	
テキストにも関わるから、	十四	3351	東歌・常陸国の雑歌		筑波祢	筑波嶺	
作者が誰を歌の受け手と	十四	3388	東歌・常陸国の相聞往来		筑波祢	筑波嶺	
想定して詠むかによって	十四	3389	東歌・常陸国の相聞往来		都久波夜麻	筑波山	
も、異なってくるであろ	十四	3390	東歌・常陸国の相聞往来		筑波祢	筑波嶺	
う。ただ、ここで景観の	十四	3391	東歌・常陸国の相聞往来		筑波祢	筑波嶺	
捉え方の差をすべて個人	十四	3392	東歌・常陸国の相聞往来		筑波祢	筑波嶺	
の細かな文化的コンテク	十四	3393	東歌・常陸国の相聞往来		筑波祢	筑波嶺	
ストの差に帰してしまう	十四	3394	東歌・常陸国の相聞往来		乎豆久波祢	小筑波嶺	
というのは適当ではない。	十四	3395	東歌・常陸国の相聞往来		乎豆久波乃	小筑波の嶺	
類似した階層 (貴族、官	十四	3396	東歌・常陸国の相聞往来		乎豆久波乃祢	小筑波	
	二十	4367	—		都久波尼	筑波嶺	占部小竜
	二十	4369	—		都久波祢	筑波嶺	大舍人部千文
	二十	4371	—		都久波能夜麻	筑波の山	占部広方

人、庶民など)で居住地も比較的近い⁽¹⁶⁾か否かなど、文化的コンテクストをほぼ共有する集団であるか否かを考慮して、景観に対する認識の共通性を検討するのが良いであろう。

3.2 筑波山

筑波山は関東平野の北東部に位置し、北に八溝山地が続く孤立的な小山地である筑波山地の主峰である。標高は約876メートルとそれほど高くはないが、関東平野のほぼ全域から望むことができる。表3を見ると、巻十四の東歌に見える筑波山を詠んだ11首は全てが常陸国の歌である。筑波山がとりわけ常陸国の人々に親しまれていたことが分かる。また、東歌の部立てをみると9首が相聞歌で、大半を占める。また、一方で常陸国の東歌は12首あるが、東歌の部立てを見ると11首に筑波山が詠まれているのである。この点からもいかに筑波山が常陸国の人々にとって親しい山であったかがよく分かる。

このように多くの歌に筑波山が詠まれている背景には、常陸国の各地から望見できることとともに、『常陸国風土記』の「筑波郡」の段にみえるように歌垣の風習などで知られ、筑波郡周辺の人々には古くから特に親しまれていた山であったことが考えられる。つまり、生活と結びついた親しい郷土の⁽¹⁷⁾山という当時の人々の共通認識があったことが窺える。次の歌をみてみよう。

妹が門いや遠そきぬ筑波山隠れぬほとに袖は振りてな (巻十四・3389)

の場合、筑波山の名は出ているが、必ずしも山そのものを描写しているわけではない。しかし、筑波山が嬬歌の催される場所であることから、筑波山という山の名を詠み込むことによって、恋を強くイメージさせ、作者の思いを容易に相手に伝えることができたのであろう。いわば心理的連想が、当時の常陸国の人々に共通した意識として存在していたといえよう。

また、防人の歌が3首ある。

橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも (巻二十・4371)

は、直接的には「橋の下を吹く風のかぐわしい筑波の山を恋しく思わずにはいられようか」と故郷の筑波山を懐かしむ気持ちを素直に歌ったものであろう。

我が面の忘れもしだは筑波嶺を振り放け見つつ妹は偲はね (巻二十・4367)

は4369と同様に「妹」を偲ぶ歌である。作者についてみると、4367は茨城郡の占部小竜、4369は那賀郡の大舎人部千文で、4371は占部広方である。占部広方は何郡の人かは見えないが、茨城郡に占部氏が見えるので、常陸国の住人とみて良いであろう。つまり、これらの3首はいずれも遠く西海道の地に滞在して、故郷のシンボル筑波山を詠み、「妹」を偲んでいるのである。

一方、雑歌の8首は、作者はいずれも中央出身の官人で常陸に赴任した高橋虫麻呂と丹比真人国人である。題詞によれば、このうち筑波山に登って作った歌が7首あり、残りの1首も登らなかったことを惜しんで高橋虫麻呂が詠んだ歌である。つぎに、虫麻呂が詠んだ歌をみてみよう。

草枕 旅の憂へを 慰もる 事もありやと 筑波嶺に 登りて見れば 尾花散る 師付の田居に
雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の 良けくを見
れば 長き日に 思ひ積み来し 憂へは止みぬ (巻九・1757)

旅の憂いが慰められることもあるかと筑波山に登って展望したところ、眼前に広がる景色によって慰められたことを詠んでいる。この歌の具体的な描写から判断すると、作者の高橋虫麻呂は実際に筑波山に登り、眼前に広がった景観を詠んでいるのであろう。

先に述べたとおり筑波山における嬬歌は『常陸国風土記』にも記されていたので、当時の中央出身の官人たちは歌垣のことはよく知っていたと思われるが、そのことは詠んでいないのである。筑波山

は独立峰的で比較的目立つ割には、標高があまり高くはないことから、彼らは登ってみようと考えたのであろう。このことは、高橋虫麻呂の作になるとみられる巻九・1753と1754の、「検税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌」との題詞からも首肯できよう。すなわち、検税使が都から常陸国に派遣されてきた時に、筑波山は国府からも比較的近く、よく望むことができ(図3)、嬬歌で有名であったので、虫麻呂が大伴卿を案内して登ったのであろうと考えられるのである。国見の意味合いもあったかも知れないが、いわば観光登山の嚆矢ともいえよう。なお、巻九・1759は「筑波の嶺に登りて嬬歌の会を為せし日に作りし歌」との題詞があり、虫麻呂が歌垣に大きな関心を抱いていたことが分かる。

このように筑波山は常陸国府から西方に望むことができ、都から遠く離れた常陸国府に赴任した高橋虫麻呂にとっては毎日眼に映る山であったから、自然と多く歌に詠むことになったのであろう。その筑波讃歌とも言える内容は、広く知られていた筑波山を通して詠んだ、任地である常陸の地方讃歌とも理解できるだろう。

また、丹比真人国人の歌の場合は

鶏が鳴く 東の国に 高山は きはにあれども 二神の 貴き山の 並み立ちの 見が欲し山と
神代より 人の言ひ継ぎ 国見する 筑波の山を 冬ごもり 時じき時と 見ずて行かば 益し
て恋しみ 雪消する 山道すらを なづみぞ我が来る (巻三・382)

と、国見の山としているが、同時に男神・女神の坐す貴い山であると人口に膾炙していた山で、登らなければあとでかえって一層筑波の山を恋しく思うだろうと、雪解けの足場の悪い時期ではあったが、苦勞しながら登って来たと言っている。やはり、筑波山に登ることに大きな価値を見出しているようである。丹比真人国人は、橘奈良麻呂の変(天平勝宝3(757)年)に連座して伊豆に流されたとも言われ、常陸に行った時期等は不明であるが、中央出身の官人であり、この長歌には登る山としての筑波山という側面が強くうかがえる。この点は高橋虫麻呂も同様である。これら中央出身の官人による歌には、登る山としての筑波山という側面が強くうかがえ、東歌や防人の歌では筑波山に登ることが、直接的には表れていなかったことと対照的である。この点は中央の出身者のもっていた筑波山のイメージの一面を物語っているであろう。

いずれにせよ万葉集に詠まれた筑波山は、富士山とは少しばかり異なるようであるが、ここにも常陸の住人がイメージする筑波山と中央官人のイメージする筑波山との間には乖離があるといえよう。⁽²⁰⁾



図3 常陸国府から見た筑波山(カシミール3Dにより作成)

3.3 立山

立山は富山県南東部、北アルプス北部に位置し、雄山(3003m)、大汝山(3015m)、富士ノ折立からなる。万葉集には立山の名を詠み込んだ歌は5首あり、その全てが大伴家持の作である。

天離る 鄙に名かかず 越の中 国内のことごと 山はしも しじにあれども 川はしも さは
に行けども 統め神の 領きいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる
片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに 立つ霧の 思い過ぎめや あり通ひ いや年のほに よその
みも 振り分け見つ 万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも告げむ 音のみも 名のみ
も聞きて ともしぶるがね (巻十七・4000)

は、立山が神のおさめる山で、高くても夏でも雪が積もっているという立山讃歌とでも言えるような歌であり、他3首にも常夏の雪が詠まれている。

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬鏡漬かすも (卷十七・4024)

は、常夏の雪を詠んでいるわけではないが、やはり雪にちなんで詠んでいる。

奈良盆地では夏に雪を見ることはないので、天平17(745)年7月家持が越中守として赴任した時に、氷見の海岸に程近い越中国府から遠望した立山が夏にもかかわらず雪を頂いていたことは、一際印象深かったものと思われる。それがこのような歌を詠ませたのではなからうか。

このように立山に関しては、家持の歌だけであるので、これらの歌からは雪を頂いた立山の景観が彼にとっては神の領知する霊山というイメージをむすんでいるようである。しかし、残念ながらそれが越中の人々に共有されていたものか否かについては明らかにし得ない。

4 畿内の山—境界との関わり—

図2にみるように、畿内では国境など境界付近にある山が比較的多く万葉集に詠まれている。これらのなかで特に数多く詠まれている妹背山、逢坂山を例に、景観とかかわってどのように詠まれているか見てみることにしたい。

4.1 妹背山とその景観

妹背山という名称の山は和歌浦の小島をはじめ高知県宿毛市の沖ノ島など各地に見られるが、万葉集に詠まれた妹背山は、詠まれた内容から考えると紀ノ川中流沿岸の背山・妹山とみてよいであろう。ただ、妹背山は、ひとつの山ではなく、背山と妹山は別個の山とされる。

万葉集のなかで妹背山の表記は表4にみるようにさまざまであるが、これらを合わせて数えると、大和国にある山以外では、筑波山について多い14首に詠まれている。

作者が判っている歌でみると、「背の山」を詠んだものでは持統4(690)年の紀伊国行幸に際しての阿閉皇女の歌が最も古く(卷一・35)、「妹山」は神亀元(724)年の聖武天皇の紀伊国行幸に際して笠金村が詠んだ「妹

表4 妹背山を詠んだ歌

	卷	歌番号	部	立	表記(万葉)	表記(現代)	作者
背の山」(卷四・544)	一	35	雑歌	立	勢能山	背の山	阿閉皇女
が最も古い。妹背山が	三	285	雑歌	立	勢能山	勢能山	丹比真人笠麻呂
あるのは紀ノ川兩岸か	三	286	雑歌	立	勢能山	勢能山	春日蔵首老
ら山が迫る地形で、右	三	291	雑歌	立	勢能山	勢能山	小田事
岸にあった「背」山に	四	544	相聞	立	妹背乃山	妹背の山	笠朝臣金村
対して、「いも」とい	七	1098	雑歌(山)	立	妹山	妹山	
う連想から、左岸の小	七	1193	雑歌(羈旅)	立	勢能山	背の山	藤原卿
丘に妹山を求めたらし	七	1195	雑歌(羈旅)	立	妹背之山	妹背の山	藤原卿
⁽²¹⁾ い。	七	1208	雑歌(羈旅)	立	勢能山	背の山	
背山、妹山ともにこ	七	1209	雑歌(羈旅)	立	妹与山	妹と背の山	
れまでにみてきた富士	七	1210	雑歌(羈旅)	立	妹勢能山	妹と背の山	
山、筑波山とは異なり、	七	1247	雑歌(羈旅)	立	妹与勢能山	妹背の山	柿本朝臣人麿歌集
山の高さは170メー	九	1676	雑歌	立	勢能山	勢能山	長忌寸意吉麻呂?
トルにも満たず大変低く、	十三	3318	問答歌	立	妹乃山	妹の山	
山体も小さく、山とい	十三	3318	問答歌	立	勢能山	背の山	
うよりも丘という方が							

適当なくらいである。このような小丘にもかかわらず14首もの多くの歌に詠まれたのはなぜだろうか。それなりの理由があったことと考えると、有名な「大化改新詔」⁽²²⁾にみえる四至畿内の南限として、この紀ノ川沿岸にある「兄山」が記されていることが想起される。つまり「大化改新詔」の存否は措くとして、かつては畿内の南の境と認識され、少なくとも8世紀はじめにはよく知られた場所であったことが考えられる。このようなことは、阿閉皇女が作歌した

これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ背の山 (巻一・35)

によく表れている。持統天皇の頃、飛鳥から紀伊国に行くには南海道があった。都から南海道を南下すると、現在の五條市あたりで紀ノ川の沿岸に出る。そこから和泉山脈の南縁に沿って西に向かう⁽²³⁾。現在、大和国と紀伊国の国境とされている真土山付近は、両岸の山地が紀ノ川に迫り狭隘部をなしている。真土山を過ぎると、現在の高野口町大野を過ぎたあたりのかかり手前から背山を望むことができる(図4)。背山までの約20kmは、紀ノ川北岸には幅1km前後の河岸段丘(開析扇状地)、その下位に沖積低地がある。つまり幅2km程度の緩傾斜地と平坦面があり、南海道を西下する開放的な空間がしばらく続く。ところが、現かつらぎ町妙寺あたりからは、紀ノ川右岸の標高わずか168mにすぎない孤立丘陵である背山が行く手を塞ぐようにみえる。また、背山を眼前にすると、左岸に妹山、両者の間の川中に船岡山が迫る。左右から紀ノ川に山脚が迫り、いかにも閉塞された印象を受ける。しかし、この狭隘部を抜けると、谷幅が下流に向けて広がり、いよいよ開放的な景観となる。このように背山は、南海道のルートの中でも印象的なポイントとなっている。しかもそのようなところを通過すると、もう畿内ではないのだという思いも手伝って一層印象的な場所となるのであろう。旅の通過点であるけれども、かつては畿内と畿外を画する地点であり、それに相応しく印象的である背妹山が旅人の心を深くひきつけて、歌われていたようである。

ところで背山は、

妹に恋ひ我が越え行けば背の山の妹に
恋ひずてあるがともしさ (巻七・1208)

と「越え行く」と表現されているところからすると、峠のようにのぼって越えるという地形が示唆されている。つまり、前記したように妹背山の位置は紀ノ川に南北から山脚が迫る地点であり、これらの歌に詠まれた景観から判断すると、南側の川沿いを南海道が通過していたというよりも、背山の北側山腹を通過していた⁽²⁵⁾と考えると、歌に詠まれたように「越え行く」との表現と一致し、南海道のルートを復原する際にも参考になる。

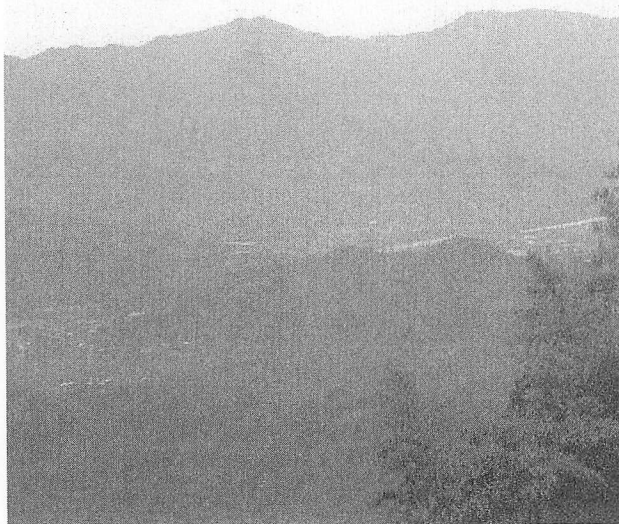


図4 妹背山

このようにみえてくると、南海道の要衝に位置することから、妹背山が詠まれた歌の半数の7首が羈旅に際しての歌であり、ほとんどが紀伊国行幸をはじめとする旅に関連して詠まれたものであるという特徴が生まれてくることも首肯できよう。

ところで、相間に分類されているのは、笠朝臣金村の

後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを (巻四・544)

だけである。ほとんどが部立ては雑歌で、半数は羈旅の歌とされているものの、その多くの内容は、

妹背山(妹山・背山、兄山)という名称からの連想であろうか、

背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す (巻七・1193)

我妹子に我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹と背の山

のように、背の山の景観を詠みながらも男女の恋情にかかわる歌が多い。

このように妹背山は、名の知られた交通上の要衝で、大和の人々にとってかつては畿外への出口というやや特別な感懐を覚えさせる場所であるとともに、かつその名称から旅の途次において都あるいはその周辺に住む妹、あるいは都にあって旅路にある背を思い浮かばせる場所となっていたのであろう。

4.2 逢坂山とその景観

逢坂山(相坂山)は、古北陸道(平城京以前)の山城国と近江国の国境に位置する標高約325メートルの山である。万葉集には逢坂山は7首(手向けの山を含む)詠まれており、部立ては雑歌、相聞、挽歌と多様である。このうち、雑歌の

そらみつ 大和の国 あをによし 奈良山越えて 山背の 管木の原 ちはやぶる 宇治の渡り
岡の屋の 阿児尼の原を 千歳に 欠くことなく 万代に あり通はむと 山科の 石田の社
の 皇神に 幣取り向けて 我は越え行く 逢坂山 (巻十三・3236)

大君の 命恐み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む 泉の川の 速き瀬を 掉さし渡りち
はやぶる 宇治の渡りの 激つ瀬を 見つ渡りて 近江道の 相坂山に 手向けして 我が越
え行けば 楽浪の 志賀の唐崎 幸くあらば またかへり見む 道の隈 八十隈ごとに 嘆きつ
つ 我が過ぎ行けば いや遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 剣太刀 鞘ゆ抜き出で
て 伊香山いかに我がせむ 行くへ知らずて (巻十三・3240)

は、平城京から近江国へ至る道筋を多くの地名を交えて大変具体的に詠んでいる。古北陸道のルート復原に大いに参考になるばかりではなく、故郷の大和盆地を遠く離れたことを旅人に実感させ、それゆえに旅人は不安感から荒ぶる神に「手向け」(奉幣)する心情が理解される。3236の長歌は、逢坂山を越えるまでのことを淡々と詠んでいるのに対して、3240の長歌は逢坂山を越えて、志賀の唐崎あたりで「幸くあらば またかへり見む 道の隈 八十隈ごとに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば」と詠み、不安感がいよいよ増していることがよく表れている。逢坂山は単なる国境にとどまらず、畿内と畿外の境に当たり逢坂関が置かれ、この逢坂山を越えた先の近江の地が畿外であったことが、一層特別の感懐や不安感を抱かせたのではないだろうか。この点では妹背山と通じるものがある。このことはまた、

木綿畳手向けの山を今日越えていづれの野辺に廬せむ我 (巻六・1017)

よそのみに君を相見て木綿畳手向けの山を明日か越え去なむ (巻十二・3151)

に、ともに逢坂山のことが手向けの山と詠まれており、逢坂山が国境にあり、神に奉幣して道中の安全を祈願していたことがよく表れているといえよう。1017の短歌は、題詞によれば、大伴坂上郎女が賀茂神社に参拝した時に、逢坂山を越えて琵琶湖を見て夕方に戻って作った歌とあるから、緊張感をもって国境の峠を越えたところで、眼前に広がる琵琶湖とその周辺の景観は大変印象的で、すぐに畿内の地に戻るとなれば、緊張感もほぐれたことと思われる。このことは

逢坂をうち出でて見れば近江の海白木綿花に波立ちわたる (巻十三・3238)

と、眼前に広がる近江の海の景観を感動的に詠んでいることにも表れている。

また一方では、3151(前出)や

我妹子に相坂山のはだすすき穂には咲き出でず恋ひわたるかも (巻十・2283)

のように恋にかかわって逢坂山が詠まれているのは、「あふ」という言葉が男女の逢瀬を連想させ、恋情を連想させる縁ともなっているからであろう。恐れや緊張感を連想させる逢坂山は、一方ではその名称から恋情に関連して詠まれたのであろう。

逢坂山は畿内という比較的馴染みのある領域から外に出る境界に位置していることから、特別の感懐をもって詠まれるとともに、「妹」や「背」を思う気持ちを表現する際に、その名を詠み込むことによって、より確実に気持ちを伝えることができたのであろう。

このように妹背山や逢坂山の場合は、駿河の人々にとっての富士山に、常陸の人々にとっての筑波山が、直接に妹にあう逢瀬の場所、歌垣の場所であったのとは異なった、遠くにあって相手を偲ぶ場所、あるいは言葉の上で恋に結びつく場所というイメージがあったと言えそうである。

5 大和盆地とその周辺の山

5.1 春日山、三笠山

春日山の名を詠み込んだ歌は18首で、万葉集の中に詠み込まれた固有の山名としては筑波山について多い。この春日山は、若草山から高円山の山群を指し、単独の山峰を指すのではない。一方で現在春日大社背後の御蓋山(三笠山)を指すこともある。しかし、天平勝宝8(756)歳に作成された「東大寺山堺四至図」には春日山ではなく「御蓋山」の注記がみられるので、奈良時代には御蓋山を春日山と称することは一般的ではなかったと思われる。しかし、

春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝去らず 雲居たなびき 容鳥の 間なくしば鳴く
雲居なす 心いさよひ その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと
と 立ちて居て 思ひそ我がする 逢はぬ児ゆゑに (巻三・372)

では、「春日の山の高座の三笠の山に」と2つの山名を詠んでいるので、この叙景方法を、春日の山群のなかから三笠山へと焦点を絞る表現であると解するのがよいであろう。ちなみにこの三笠山は若草山⁽²⁶⁾のことではないであろう。

歌の部立てをみると、雑歌が13首と多く、このうち秋の雑歌が6首、春の雑歌が3首となっている。ほかに相聞が4首ある。これらを詠まれた内容からもう少し詳細に見ると、秋の歌は6首と変わらないが全て黄葉を詠み、春の歌は5首になり、全て霞を詠んでいる。秋の山と黄葉、春の山と霞とが奈良時代から既にイメージとして結びつき、定式化していたことを示唆している。また、山を詠んだ万葉歌について詠まれている季節をみると、春日山に限らず秋と春が大部分を占めることも興味深い。

巻三・372(前出)は雑歌に部立てされているが、山を中心とする春の叙景歌であるとともに、内容的には逢ってくれない「児」に対する恋情を詠んでいる。また、譬喩歌に分類されている、

春日山山高からし石の上の菅の根見むに月待ち難し (巻七・1373)

は、女性との逢瀬の難しさを歌っている。したがって、相聞の4首と合わせて5首は男女間の恋や愛情を詠んでおり、春日山も恋情とのかかわりが深いといえ、日常生活の場の身近な山として捉えられていたことが分かる。

ちなみに春日山は、春日大社と東大社の背後の山であるが、これまでみたように万葉歌に詠まれた内容からは神聖な山としてのイメージはさほど湧き上がって来ない。承和8(841)年に春日大神の山内での狩猟・伐木が禁止されたこと⁽²⁷⁾から、春日大社の神山として知られるようになるので、神聖な山としてのイメージが本格的に形成されるのは9世紀になってからのことと思われる。

三笠山は前述のように春日大社背後の御蓋山(三笠山)を指し、万葉集には16首詠まれている。部

立ては雑歌が11首、相聞3首、寧楽宮を詠んだもの2首である。雑歌の季節は内容から判断できるものも含めて春が3首、秋が3首ある。秋は全て色づいた山を詠んでいるのに対して、春は容鳥、春風、桜花、花と風物の変化に富んでいる。

また、山部赤人が詠んだ

高座の三笠の山に鳴く鳥のやめば継がる恋もするかも (巻三・373)

は、その前の372とともに部立ては雑歌であるが恋の歌でもある。さらに月の歌である。

待ちかてに我がする月は妹が着る三笠の山に隠りてありけり (巻六・987)

も恋の歌といえるであろう。このように見ると相聞歌3首と合わせて5首が恋の歌ということができるので、やはり三笠山と恋愛との関わりを見出すことができよう。また月は春日山でも詠まれている。ともに都の東に位置する山であり、実際に月の動きが遅いことに待ちかねる気持ちを重ね合わせていたのであろう。

5.2 奈良山

奈良山は奈良盆地北辺、京都府との境を東西に走る低丘陵を指す。現在の平城山丘陵のことで、単独の山峰を指しているわけではない。万葉集には14首に歌われているが、歌の部立てを見ると、雑歌10首、相聞3首、挽歌1首となっている。奈良山を越えて近江方面への道筋が詠まれたものが雑歌のうち4首を占めることが特徴であろう。内容的には平城山丘陵を越えて主要道が通じていた場所柄が表れている。

また、雑歌に分類されているが、

あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川渡り 娘子らに 逢坂山に 手向けくさ 幣取り
置きて 我妹子に 近江の海の 沖つ波 来寄る浜辺を くれくれと ひとりそ我が来る 妹
が目を欲り (巻十三・3237)

は道行の歌ではあるが、結局は「家の妻に逢いたい」といっているので、やはり「妹」への思いを詠んだものといえる。そして、そのすぐ後に逢坂山が詠まれ、奈良山と逢坂山との道程が淡々と詠まれている。ここでは奈良山が旅の出発点であり、旅人はここで見送りの人と別れ、手向けしたのであろう。長屋王が「馬を寧楽山に駐めて作りし歌」に詠んだように、また奈良山が別れの地であることから「妹」への思いを強くするのであろう。巻十三・3236や3240と同様に、奈良山が大和からの最初の地名として歌われているのは、このように奈良山の歌には境の山の性格が反映されているのであろう。

しかし、一方で奈良山は都の北辺にあり、都に暮らす人々の生活の場でもあった。次にこれらの人々の歌をみていこう。笠女郎が大伴家持に贈った歌で

君に恋ひいたもすべなみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも (巻四・593)

と詠んでいるのは、奈良山が単に平城京の背後にある山であるから詠まれたというのでは必然性が感じられないが、家持の宅が佐保にあったようであるので、その背後の奈良山が詠まれたのであろう。

奈良山の小松が末のうれむぞは我が思ふ妹に逢はず止みなむ (巻十一・2487)

恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なし我が恋ふらくは (巻十二・3088)

も同様であろう。

また、秋の雑歌の部立てとなっている

奈良山の嶺のもみち葉取れば散るしぐれの雨し間なく降るらし (巻八・1585)

や巻八・1588はともにもみち葉を取ったり、手折る相手がいるので、その相手がどのような人であるかを考える必要がありそうである。しかし、題詞によれば橘宿禰奈良丸(奈良麻呂)の宴会で詠まれ

ているので、特に具体的な恋愛を前提とした詠歌と見る必要はないであろう。とはいえ、奈良山がどのように詠まれた背景には、かつての「山遊び」のような慣習があったのではないだろうか。また小松は奈良山の近景であるとともに、逢ってくれない妹を「待つ」という技巧がみられる。奈良山にかかわる表現には「小松」、「もみち葉」、「しぐれ雨」などの近景、「鳴く鳥」という聴覚的表現などがみられ、多彩である。この点は春日山、三笠山と同様である。近くに暮らす人々のまなざしが反映されているといえよう。

以上のように奈良山の場合、直接恋愛とのかかわりを詠んだ歌は少ないが、境の山としての性格から別れを伴う恋を象徴する山と日常的に見、登り、遊ぶ身近な山の両側面があり、それが恋愛の歌にも表れている。

5.3 竜田山とその景観

竜田山もまた、単独の山峰を指しているのではなく、生駒山地南端部の山峰の総称である。万葉集には13首詠まれている。大和から難波に出る要路がこの竜田山を通過し、古くから竜田越え⁽²⁸⁾と称され、これに通じる大和側の道が竜田道(竜田路)と言われた。そのため沿線の重要な景観である竜田山が、万葉集に多く詠まれたのであろう。部立ては雑歌が9首、相聞と挽歌が各1首である。これまでみてきた他の山と比べると、相聞歌の割合は低い。部立てのない

君により我が名はすでに竜田山絶えたる恋の繁きころかも (巻十七・3931)

は、平群氏女郎が大伴家持に贈った相聞歌であるので実質的には相聞が2首ということになり、この歌では竜田山の名が詠み込まれているが、それは「絶つ」を引き出す序として作者が意識して詠んだものと理解してよいだろう。

しかし、竜田山は大和と河内との国境に位置するが、竜田山を通る旅人の歌をみると

竜田山見つつ越え来し桜花散りか過ぎなむ我が帰るとに (巻二十・4396)

のように沿道の桜の景観を惜しみ、詠んでいる。逢坂山越えの時のように手向けする様子はいかがえず、竜田山を越えることに特別な感懐はないようである。その理由は、そこを越えると畿外となる逢坂山とは異なり、国境を越えて大和から河内に出ても、やはりそこは畿内であることや奈良盆地とは山一つ隔てただけで、交通も逢坂山越えと比べて頻繁であったであろうから、地理的にも心理的にも近かったことも影響しているであろう。

6 おわりにかえて—古代人の山に対する景観認識—

これまでみてきたように、東国の山の例では、作者が大和周辺の出身の官人である場合、仰ぎ見る神の山、登る山など政治や祭祀に関わる立場で山を捉えた。一方で、在地の住民では歌垣の風習からであろうか、恋と結びつき、親近感をもって捉えていた。また、妹背山、逢坂山、奈良山の例では、旅の重要な通過点であり、山を越える過程で惹起される閉塞感とそれに伴う不安感と「妹」への慕情が詠まれていた。旅人の様々な思いを投影する対象として山が捉えられていた。さらに、都周辺の山々からは東歌に詠まれた富士山や筑波山にも通じる、恋と結びついた身近な生活の舞台としての山の姿が浮かび上がったといえるだろう。

山を歌に詠む人の出身地や出自、階層および山に対する地理的近接性などが、山の景観の捉え方や表現に強い影響を与え、同じ山でも山の捉え方に差があり、歌の内容も大きく異なることも明らかとなった。つまり、景観の認識の仕方は、O.ベルクがかつて述べた「ある文化、ある社会層に固有のもので、他のところには存在しないという性質を持つ⁽²⁹⁾」ということは、万葉の時代と社会においても

言えそうである。

かつて高木市之助は『日本文学の環境』⁽³⁰⁾において、万葉集に詠まれた歌の内容を自然との関連で①寄物的関連、②詠物的関連、③叙景的関連、④正述心緒的関連の4段階に分けた。このうちの③は自然をあるがままのものとして認めて全面的に歌を覆っていることであるとした。しかし、万葉集に詠まれた自然が実は全てがあるがままであるわけではないことは、実際に叙景の場を訪れてみると実感できる。とくに山部赤人の明日香の旧都への懐旧恋慕の情を詠んだ「明日香古京讚歌」とも言える

みもろの 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる 梅の木の いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆる
ことなく ありつつも やまず通はむ 明日香の 古き都は 山高み 河とほしろし 春の日
は 山し見がほし 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづはさわく 見
るごとに 音のみし泣かゆ 古思へば (巻三・324)

のように「讚歌」となると、実際の山は高くもなく、河はさほど大きくもないのに、現代人との感覚に多少の差があるとしても、誇張があると認めざるを得ないであろう。あるがままに詠めば讚歌にならないから当然であるともいえようか。しかし全ての叙景歌について検証した結果ではないが、讚歌のように詠歌の目的が明確な場合には、作者のコンテクストを経て認識・評価された景観に対して目的に沿った修飾が加味され、歌に詠まれるのであろう。したがって、これまでみてきた山の景観をどのように捉えているかを検討する際にも、詠歌の目的を考慮することは必要であろうが、必ずしも題詞等により明確に詠歌の目的が示されているわけではないので、実際には困難なことも多い。

現代に生きる我々が眼前にする景観が、古代の人々が見ていた景観と同一ではないことは言うまでもない。自然景観に限ってみても、河川は流路を変えるし、山は浸食を受けたり火山活動によって山容を変化させたりする。しかし、形態が一変するというほど大きな変化は例外的である。形態自体に比べると植生などのいわば表面装飾は開発により大きく変化することもあった。とは言え、そのような開発行為は古代においては、造都などきわめて限られていた。つまり、大型の機械を使用する大規模開発が本格化する近代以前とりわけ19世紀までの自然景観は、平野部における条里地割の施工による水田開発等を除くと、部分的な変化は見られてもその多くが古代におけるそれと本質的には大きく異なるものではなかったであろう。このように考えると、古代人がどのように景観、特に自然景観を認識していたかについて接近しようとする時、近代初頭の明治期における景観を復原することは大いに有効であることになる。ここに古代人の自然景観に対する認識を明らかにしようとするに際して、従来の歴史地理学の景観復原という基礎的な研究方法を適用する可能性を見出すことができる。しかし、小論においては紙数の制約もあり、景観復原を通じての古代人の景観認識への接近については他日を期す事としたい。

ここでは、これまで万葉集に収載された歌のなかで山がどのように詠まれているかについて検討を加えてきたことを通じて、日本を代表する自然環境である山に対する人々の景観認識についてまとめることを試みた。

ところで、これまで万葉集や古典を歴史地理的検討の素材として利用する場合には、その地名を万葉学の成果に沿って活用することが多かったが、近年千田稔や日下雅義などにより注目すべき新しい研究が見られる。千田は、歴史地理学における重要課題である景観復原に止まらず、景観やその場所の意味を明らかにすることを唱え、『延喜式』の祝詞や『古事記』、『風土記』などの古典を素材として場所の意味を記号論的に解釈しようとした⁽³¹⁾。また、日下は、万葉集などを素材として、水門・岸・津・浦・浜など海岸付近の景観を表現する言葉を検討し、それらが当時の景観を復原するのに有用であることを明らかにした⁽³²⁾。

本報告は、この両者の試みをとともに重要なものであると位置づけ、万葉集に詠まれた景観実相についても考慮しながら、それが人々にどのように認識された場であったのかについて接近することが目的のひとつであった。しかし実際には限られた視点からの皮相な検討に終始した感が強く、古代の人々の山に対する認識や山という場の意味についても十分に接近することができなかった。古典を歴史地理学研究に利用することについて、金坂清則が、古典に記された景観や場所の意味を検討する際には、古典を研究している専門分野の研究に極力立ち入って、その成果と課題を踏まえる必要があると指摘⁽³⁴⁾していることは、本報告にもあてはまることであろう。また、詠歌の目的による修飾や誇張に関する検討をはじめとして自然景観全般に関する検討はほとんどなし得なかった。結果として多くの課題が残るばかりとなったが、これらについてはいずれ機会があれば考えてみたい。

【付記】本報告は、古代人の景観認識や領域認識はどのようなものであったのだろうかという筆者の素朴な疑問をきっかけに、万葉集を素材としてまず山を対象に検討を試みたものである。その内容は表題にあるとおり筆者の覚書の域を出ない未成熟のものであるが、読者諸賢には意のあるところにご理解を賜り、御寛恕を乞う次第です。

注および参考文献

- 1) 植物学者の三好学博士により与えられた名称という。辻村太郎：『景観地理学講話』、地人書館、1937年、p.1。
- 2) 辻村：前掲書、p.1。
- 3) 「生きられる空間」とは哲学者メルロ・ポンティやオットー・フリードリッヒ・ボルノウによって主張された現象学的な空間とされる。青木伸好：『地域概念』、大明堂、1985年、pp.38-46。
- 4) 志賀重昂：『日本風景論』、岩波書店、1937年、p.28、初版は明治27(1894)年10月。
- 5) 中野尊正・小林国夫：『日本の自然』岩波新書346、岩波書店、1959年、p.i。
- 6) 訓読は佐竹昭広・山田英雄ほか校注『新日本古典文学大系1~4 万葉集一~四』、岩波書店、1999年~2003年による。以下についても同様。
- 7) 「妹山・背山」を合わせた数である。
- 8) 「駿河の嶺」を含む。
- 9) 「手向けの山」2首を含む。
- 10) 「大城の山」、「城の山」を含む。
- 11) 『万葉集 二』、前掲、p.206の注。
- 12) 兼築信行：「万葉・古今・新古今に富士山はどう詠まれたか」、『国文学一解釈と教材の研究一』、第49巻2号、學燈社、2004年、pp.67-71。
- 13) 因みに現代においてもこのような富士山と恋情との関連は「松の木小唄」などの流行歌にみることができ、大変興味深い。
- 14) 兼築（前掲論文）は何よりも富士山の高さに着目されたとしているが、景観を捉える主体の違いをもう少し重視してよいと思う。
- 15) この場合は歌の作者。実際に見てはいなくても、思い描いているだけでも同様。
- 16) 奈良盆地、畿内、東国、西国という程度の相違。
- 17) 犬養孝『改訂新版 万葉の旅 中』、平凡社ライブラリー 489、平凡社、2004年、p.226。
- 18) 現、石岡市付近に所在した。筑波山までは直線距離で約14km。
- 19) 清原和義：『万葉集の風土的研究』、塙書房、1996年、p.377。
- 20) ちなみに平安時代以降も、筑波山は歌枕として多く歌われ、古今集仮名序には「つくば山にかけて君をねがひ」と、筑波山を代表的な歌枕のひとつに挙げている。この頃になると男女二峰を有する山容と歌垣の連想から、歌人たちは筑波を恋の山としてみるようになっていたようである。
- 21) 木村康平：「いもせのやま（妹背乃山・妹勢能山）」（青木生子・橋本達雄監修、青木周平・神田典城・西條勉ほか編『万葉ことは事典』、大和書房、2001年）p.79。
- 22) 『日本書紀』孝徳天皇大化二年正月甲子朔条。

- 23) 南海道に関しては、足利健亮：『日本古代地理研究』大明堂、1985、pp.272-291、中野榮治：『紀伊国の条里制』古今書院、1989年、pp.35-50など。
- 24) 背山は頂上が2つに分かれており、標高の高い北側の城山（168m）を「背山」に、南側のやや低い鉢伏山（163m）を「妹山」とする説もある（本居内遠：『妹山背山弁』。犬養孝：「妹と背の山考」（『萬葉の風土統』、塙書房、1972年、所収）、pp.167-178）。
- 25) 足利：前掲書。
- 26) 角川地名大辞典によると、若草山が三笠山と称されるようになるのは江戸期からという（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典29 奈良県』、1990年、p.1040）。
- 27) 『続日本後紀』承和8年3月壬申朔条。
- 28) 亀の瀬越えともいう。
- 29) オギュスタン・ベルク著（篠田勝英訳）：『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』講談社現代新書1007、講談社、1990年、p.49。
- 30) 高木市之助：「日本文学の環境」（『高木市之助全集 第7巻 日本文学の環境・他山録』、講談社、所収）、1976年、pp.33-54。初出は高木市之助：『日本文学の環境』、河出書房、1938年。
- 31) 千田稔：「地理的『場』の始原性を求めて—記号論的アプローチ」、『人文地理』32-1、1980年、pp.47-62、など。
- 32) 千田稔：「古代日本における〈土地分類〉」（谷岡武雄・浮田典良編『歴史地理学プロシーディングス』所収）、1982年、pp.271-279、など。
- 33) 日下雅義：「『記紀』『万葉集』に自然の景をよむ」（同：『古代景観の復原』、中央公論社、所収）1991年、p.59-78。
- 34) 金坂清則：「古典にみる環境・景観・空間認識と歴史地理学」、『歴史地理学』172、1995年、p.104。